

# 高齢者の脊髄損傷

現在、日本人の年齢中央値は、47.3歳で世界トップである（CIA The World Factbook 2017年推定値）。これは米国、中国に比べ10歳高く、インド（27.9歳）とは20歳もの開きがある。日本の高齢化率（総人口のなかの65歳以上の割合）は28%に達しており、超高齢社会（高齢化率>21%）を迎えて久しい。

高齢人口の大幅な増加によって、わが国の疾病構造は大きく変化した。整形外科領域においても、加齢に伴う変性疾患が増加し、治療対象の首座を占めている。同時に、高齢者の低エネルギー外傷も、着実に増えつつある。

従来、脊椎脊髄損傷は若年者に多く発生し、その原因は交通事故やスポーツであった。しかし、脊椎脊髄損傷の受傷時年齢は、近年急速に高くなっており、いまや80歳代・90歳代での受傷もまれではない。高齢者の受傷原因の多くは、平地での転倒といった低エネルギー外傷である。低エネルギー外傷では、初診時には症状が乏しい場合もあり、脊椎脊髄損傷を見逃さぬよう注意が必要である。また治療においても、高齢者では予備能が低く、併存疾患が多いため、合併症には十分留意すべきである。低エネルギー外傷であっても、高齢者の脊椎脊髄損傷の予後は不良であり、死亡に至る例も少なくない。高齢者の脊椎脊髄損傷に対しては、従来とは異なるアプローチが求められるが、この領域における研究の蓄積は未だ十分ではない。

本特集では、「高齢者の脊髄損傷」にフォーカスし、第一線の先生方に最新の知見についてご執筆いただいた。疫学、治療、予防と様々な角度から高齢者の脊髄損傷の up to date を知ることができる貴重な一冊となったと感じている。本誌が、皆様にとって、わが国が直面する問題に対してどのような取り組みが必要なのかを考えるきっかけとなれば幸いである。

（筑田博隆）